

旭川の銘石

かむいこたんいし  
神居古潭石

をご存じですか？



神居古潭石（常設展示室）

これは、旭川から札幌へ向かう神居古潭峡谷で、特に神居大橋（つり橋）付近で産出する濃青緑～黒色をした緻密でかたい石です。かつては、この場所で数多く採取することができ、今でも庭石など、観賞石（水石）として珍重されている石です。

神居古潭石のなかで最も商品価値が高いとされたものは、表面がよく水磨され、しかも脂ぎって黒光りする岩石でした。緑色が混ざると価値が落ちるようです。

実はこの岩石、岩石学的には変成岩に分類され、ほとんどが変成鉱物であるアクチノ閃石からなるアクチノ閃石片岩です。また、緑色の神居古潭石も元々は、玄武岩もしくは玄武岩質のハイアロクラスタイト（これはマグマが海底に噴出した時、海水に触れて急冷しガラス質となり、さらに細粉となって堆積したものを言います）が緑色岩化したものです。また、藍閃石の他、それより鉄分が少し多いクロス閃石が含まれる青っぽい片岩（青色片岩）も神居古潭石と呼ばれています。

この神居古潭石は、元々は、南東太平洋の海嶺と呼ばれる場所で、海底火山の噴火の時に流れ出した玄武岩質溶岩です。この溶岩が海水中で固まった後、海洋プレートの移動に伴い数千kmの道のりを経て、現在の日本列島付近にあった海溝で、地下、約十数kmまで押し込まれました。その沈み込み過程で長い時間と高い圧力を受け神居古潭石と呼ばれる変成岩ができました。これが今から1億数千年前と考えられています。やがて今の神居古潭の山々を作っている神居古潭変成岩類と呼ばれる様々な岩体が、地表へ上昇していく時、この神居古潭石も一緒に持ち上げられ山地を形成しました。その後、山地が浸食され、神居古潭石を含む岩体も崩れた後、石狩川を流れる水によって長い年月をかけて水磨され、今、見ることができる神居古潭石になりました。

かつては神居大橋（つり橋）周辺の川原にたくさんありましたが、もうすっかりとり尽くされてしまい、今ではほとんど見ることはできません。（地質学・岩石学担当学芸員 向井正幸）